

〔研究ノート〕

福沢諭吉の教育思想

藤 田 友 治

目 次

- 1 福沢諭吉の自己教育
- 2 福沢諭吉・教育者として
- 3 福沢諭吉の教育思想
- 4 丸山真男の福沢観
- 5 おわりに

1 福沢諭吉の自己教育

「日本のヴォルテール」¹⁾（丸山真男の評価）といわれた明治維新以後の最大の啓蒙思想家は福沢諭吉でしょう。影響力の大きさから、「文部省は竹橋に在り，文部卿は三田に在り」²⁾とまでいわれました。

福沢諭吉は天保5（1834年）の12月12日に生まれましたが、旧暦ですから、今日の西暦で換算しますと1835年1月10日に大坂（当時，今日は大阪）堂島玉江橋北詰の中津藩蔵屋敷に誕生しました。福沢はどのような時代背景の下で生まれ、教育されたか、そらに自己自身を教育したかを追思惟（ついで）しましょう。優れた教育者は、自己自身を目的意識的に自己教育をしているのです。

福沢諭吉は父の福沢百助^{ひやくすけ}の第五子（末子）として生まれますが、天保7（1836）年、父百助^{ひやくすけ}の死によって生後18か月で中津に帰っています。父は武士として下級武士に甘んじ、それ故、亡父のことを想起してはひとり泣き、「門閥制度は親のかたきでござ

1) 丸山真男「福沢に於ける『実学』の転回——福沢諭吉の哲学研究序説——」（『丸山真男集，第三，岩波書店，1995年）。

2) 国民教育奨励会『教育五十年史』（民友社，1922年9月）28頁。

ざる」(『福翁自伝』)というのです。ここに、封建制度への批判と自己の置かれた位置に疎外感をもって幼少期、思春期をおくっていることがわかります。父の百助は享年44歳、残された妻・お順^{じゅん}は子供らを引きつれ中津に帰って生活をします。長男・三之助に家督を相続させますが、まだ10歳であったのです。

大坂で育っていた兄弟たちや諭吉は、豊前國中津の言葉遣いや髪^{かみ}の形、生活のスタイルが少し異なるのを「気恥ずかしいように思って」(『福翁自伝』)自然にうちにひっ込んでしまうようになっています。今日でいうと、自閉的、閉じ込み症候群でしょう。中津の人が「そうじゃちこ」というところを、大坂では「そうでおもす」というようなわずかな異なりが、幼少期においては「世界」の異なり、異邦人のように対立、疎外の原因となっているのです。諭吉は活発で言葉もよく発しているながら、木登りが不得手とか、水泳が出来ないとかは中津の人々の中に入って集団でいることが出来ず、孤立していたせいでしょう。

諭吉の父は漢学者で儒教主義、厳格であり、芝居さえ見ることもさえ許可しなかったのですが、封建制度の秩序の中において、下級武士として束縛されていました。丸山真男のいう「である」論理^{はば}が巾をきかせていたのです。父が存命であれば諭吉は寺の坊主になっていたと母が諭吉にいますが、「名を成すこと」の可能性を父は諭吉に期待したのでしょうか。そんな父の短命のくやしさを思って、諭吉は学問を志すようになります。「私は坊主にならなかった。坊主にならず家にいたので学問をすべきはずである」(『福翁自伝』)と義務感からのべています。しかし、『福翁自伝』は諭吉の晩年64歳の時刊行されています。1897年から翌年にかけて口述筆記をもとにした自伝で、『自伝』の中では、「自伝文学の最高傑作」とたいへん評価の高い作品ですが、やはり史料批判はたいせつです。つまり、同時代史料ではなく、後代の総括、評価、粉飾が入り混じった作品であるという事は忘れてはならないでしょう。一般に人間はどうしても、過去の自分自身の行為を自己弁護、美化しがちであるという側面もっています。或いは、人によっては逆に、極端に過去を全否定してしまうなど、いずれにしても正確ではなく、対象との距離が美化か否定か両極へ振れやすくなってしまふのです。

諭吉の場合も、父の短命の不幸を封建制度におき、「門閥制度は親のかたき」とすることにより、父が望んだ「名を成す」道＝学問による立身出世という『学問のすゝめ』が自己の義務になっています。『自伝』において「学問すべきはず」という当為

兄は儒教主義で「孝悌忠信」です。ある時反故の紙をそろえているところを、諭吉がドタバタ踏んで通りますが、兄が大喝一声、殿様の名のある反故を踏むとは何事ぞ、としっかりつけました。ところが、諭吉は殿様の名のある反故を踏んだら悪いというな

ら、神様の名のあるお札を踏んだらどうだろうと思って、「お札を踏んでみたらところがない。」と神罰^{みょうばつ}冥罰は大嘘といなり様の神体を見るのです。こうして、近代合理主義、プラグマティズムの精神を自分自身の生活の実践の中から築いていったのです。ここで、福沢諭吉自身の宗教観も形成されていったのです。「宗教は茶の如し」³⁾と社会の安寧の為に必要を唱えますが、本人自身は「宗教心に乏しく」無神論に近いのです。かつて拙論「福沢諭吉の宗教観——宗教は茶の如し——」(『知識人の宗教観』三一書房、1998年)で論じたことですが、宗教による効用を認めているのです。

プロテスタントの勤勉、信仰心は資本主義の精神に適合しました(マックス・ウェーバー)。福沢の無宗教的かつ科学的な装いの「因果応報」論は先人への礼、其辛苦経営の功德に報じ、子孫・家族のために一生懸命に働くことで文明開化に役立ち、資本主義の精神に大いに適合したのです。従来宗教、浄土真宗のとく善人でさえ往生できるのであれば、ましていわんや悪人こそ往生できるという悪人正因説では心の救いを現世で得ることとなり救われてしまうのです。これに対し、必死の努力をした者のみが「因果応報」に幸福を得ることができるという福沢の宗教観の方が文明開化の精神にかなっていたといえるでしょう。

さて、諭吉は中津での生活から脱出して、長崎で蘭学^{らん}修業をしますが、この背景にはペリーが浦賀に来て、これへの対抗として中津藩が大砲鑄造や洋式砲術を調べるため蘭学が必要となったのです。オランダ語は医学生に学んだりしましたが、ほとんど1年間独学で学習しています。この時の必死の学習が、自己教育の確立をなし、生活力を含めて、「一身独立」の基礎を築いたといえるでしょう。明治2(1869)年2月2日に福沢は松山棟庵宛ての手紙(『福沢諭吉全集』第17巻所収)に「一身独立して一家独立、一国独立、天下独立と。其一身を独立しむるは、他なし、先づ智識を開くなり」と書いています。この一身独立こそが自己教育、自己開発にあるのです。福沢は教育者でしたが、教授することに満足するのではなく、教えると同時に自己が学ぶ主体として、ともに学ぼうとしています。

福沢は咸臨丸^{かんりんまる}に乗ってアメリカに行き、ウェブストルの英語辞書を購入して、日本に初めて辞書が入りました。ところが、これまでの蘭書と異なり英語の辞書がむずか

3) 福沢諭吉『福沢諭吉全集』(第16巻、岩波書店、1898年9月4日)。

しく、自由自在に読めない。慶応義塾で教える福沢は「教授とはいいいながら実は教えるがごとく、学ぶがごとく、ともに勉強しているうちに」（『福翁自伝』——傍点は引用者——）と共学（男女共学ではなく、教授者と学習者の共に学ぶという意味において）の精神を強調しています。教えることに先だつ、教育者自身の自己教育が、あらゆる教育の原点です。福沢がアメリカから帰国した万延元（1860）年8月に最初の著訳書『増訂華英通語』^{かえいつうご}を出版し、翻訳方（幕府）として雇われています。福沢の势力的な出版活動のはじめですが、「これがそもそも私が出版の始の始まり。まずこの両三年間というものは、人に教えるというよりも自分でもって英語研究が専業であった」（『福翁自伝』——傍点は引用者——）というのです。ここで、教授者は自己教育、学習さらに研究者としてある必要がとられています。では、福沢はどのような教育者であったのでしょうか。次に、福沢の教育者としての役割、活動、思想をみることにしましょう。

2 福沢諭吉・教育者として

安政4（1857）年に福沢は大坂の緒方洪庵^{おがたこうあん}の塾長に推されました。塾生は約80人、塾生の自発的学習によってオランダ語や物理学や化学を学んでいました。安政5（1858）年10月、諭吉の23歳のとき蘭学^{らん}の修行の成果が認められ、江戸に蘭学塾を開いて、その教師として選ばれます。教育者・福沢諭吉の誕生です。この蘭学塾が後の慶応義塾の起源となります。

慶応義塾は慶応4（1868）年、諭吉33歳の時、新銭座に150坪の塾舎を建てて移転し（4月）、この年の元号「慶応」をとって塾名としますが、やがて明治維新によって、元号は9月に「明治」に改元されます。福沢は新政府から出仕の命を受けましたが、辞退し、「平民」となることを決意し、以後「無位無官」を通します。

福沢は学問によって世に認められたことから、下級武士の子弟として立身出世をしますが、出世そのものを自己目的にしたことはありません。「藩に仕えて藩政をどうしようとも思わず、立身出世していばろうとも思わず、世間でいう功名心は腹の底から洗ったようになんにもなかった」（『福翁自伝』）というのです。事実、しばしば福沢は名誉あると思われる地位を辞しています。例えば、明治11（1878）年に最初の東京府会議員に選出されましたが、これを明治13（1880）年に辞任しています。また、明治12（1879）年に東京学士会院の設立にともない、初代会長に就任しましたが、明

治14（1881）年にこの会員も辞退しています。また、拝金教の教祖のようにいわれたこともありましたが、教育のため慶応義塾へ私財を投入しており、明治33（1900）年に多年にわたる著書、翻訳、教育などの功勞につき皇室より金五万円を下賜されたのを、慶応義塾基本金中に寄付しています。

かつて慶応4（1868）年の移転のときにも1000両の借金のために福沢の『西洋事情』外編三冊の版木や草稿類を売り払っており、教育者として、さらに経営者としての苦勞を山口良藏宛書翰（『福沢諭吉全集』第17巻所収）において語っています。「僕は学校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず、之を総称して一社中と名け、僕は社頭の職掌相勤、読書は勿論^{ママ}眠食（寢食——引用者）の世話塵芥の始末まで周旋、其餘の社中にも各々其職分あり」と素直に手紙を送っています。ここでも、教師—生徒という関係でなく、共同の仕事の分担、職務分担による分業を採用した教育方針をとっていることがわかります。これは、大坂の適塾での塾生の仲間社会における塾長としての経験に根ざしているものでしょう。

明治4（1871）年3月16日に三田の旧島原藩の土地1万2,000坪弱の貸し下げと建物700坪（約770両）の払い下げを受け⁴⁾、現在の慶応義塾の本拠をつくっています。教育環境の制度や整備に全力をあげ、情熱を注いでいます。福沢の教育にかける熱意は幕末から明治維新の最中においても発揮されます。幕府から長州征伐に塾生の出兵をいわれた時も、「こんなわからない戦争に鉄砲をかつがせるというならば、……大事な留学生に帰って鉄砲をかつげなんて、ソナ不似合いなことをするには及ばぬ」（『福翁自伝』）といい、病氣とウソをいって断らせてしまいます。福沢は幕府にも新政府側にもどちらにも味方せず、むしろ「いよいよ戦争にきまればぼくは荷物をこしらえて逃げなくてはならぬ」といって加藤弘之をおこらせてしまいます。明治維新の最中、5月15日に上野に彰義隊との戦いでも、塾生がソワソワと砲声の音に反応しているのに対し、福沢は動揺することなく、いつも通りの講義（ウェーランドの経済書）を行い、「この塾の有らん限り日本文明の命脈は絶たれない」といったことは有名です。

慶応義塾の塾生の出身を調べると文久3（1863）年から明治15（1882）年までの入塾生の総数は3967名。その内訳は華族37名、士族2965名、平民959名、朝鮮人6名で

4) 高橋昌郎『福沢諭吉』（清水新書、1984年）。

した。平民は当初、3%弱でわずかでしたが、明治10（1877）年には48%と急増しています。これは、西南戦争の影響であり、インフレの増加と合わせ、貧困のために学業を放棄せざるを得ない塾生が増加しました。このため、福沢は政府から資金を借りようとして「私塾維持之事資本拝借之願」を提出したり、文部卿の自宅をたずねたり、内務卿の伊藤博文をたずねたりして全力を尽くしています。しかし、政府はこれに 응えず断られ、ついに福沢は明治12（1879）年10月の教育会議において、慶応義塾の維持は困難として、教職員の給料を従来 of 三分の一に減じます。さらに、明治13（1880）年9月より、慶応義塾の廃校を福沢は決意し、高弟の小幡篤次郎に打ち明けています。

生活困窮の士族の子弟の教育のために政府から拝借金を得ようとしたのですが、うまくいかず、最大の困難に直面したのです。11月23日に「慶応義塾維持法案」を発表し、広く社中の人々に寄付を募り、数年間で160余名をあつめ、少数の富豪からではなく、多数の人々の浄財を集めたわけです。ここに、私学教育の原点があるといえるでしょう。

教育者として、教育環境の整備、生徒の教育の機会を増し、奨学せしめる方法を全力でなした福沢は、生徒の教材、教科書をも執筆しています。

明治元（1868）年に『訓蒙窮理図解』はヨーロッパの合理的考法を教え、それは今日の理科にあたります。明治2（1869）年に『世界国尽』を出版し、世界地理を扱い、特徴としては低学年の生徒にも日本と並行して世界を教えた方がいいという考えです。今日の教育では日本の地理の学習の後、世界を教えますから、国際化時代にあつては、この福沢の並方して、早くから世界を教えるというのは再び見直されてもいいと思われます。

明治4（1871）年に『啓蒙手習之文』において難しい漢字をやたら詰込むことではなくて、しかし必要な漢字は教えるのが当然としています。明治5（1872）年には『学問のすゝめ』を出版し、大ベストセラーとなります。これは“国民の教科書”になります。同年に『童蒙教草』は道徳をテーマにしています。明治6（1873）年には『帳合之法』では簿記の教科書であり、福沢は「余が著訳書中最も面倒にして最も筆を労したるもの」（「福沢全集緒言」）と述懐しています。さらに、同年『日本地図草紙』は日本地理のテキスト、『文字之教』は国語のそれと精力的に発行しています。明治10（1877）年に『民間経済録』は経済のテキストとして、体裁も教科書らしくなっていました。

この他、出版のためではなくて、息子の一太郎、捨次郎の2人のために「ひゞのをしへ」（明治4年）、「翻訳之友」（明治8年）、「福沢氏古銭配分の記」（明治11年）これらはいずれも『福沢諭吉全集』に収められており、我が子への父としての教えですが、教育者福沢の考えを知るよき史料となっています。

これらの教科書は解り易く、生徒たちに視覚的に訴える工夫がなされています⁵⁾。例えば、『訓蒙窮理図解』では、物理現象を図解して、挿絵を入れて一目瞭然に理解をさせようとしています。『世界国尽』においても図、絵を多く入れています。今日の教科書の視聴覚的要素の源流とっていいでしょう。

福沢の教科書はわかり易いだけではなくて、口唱するにリズムがあり、テンポがよいのも特徴です。有名な冒頭の一句、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と云へり。されば天より人を生ずるには」（『学問のすゝめ』——傍点は引用者——）と格調ある文章で、「造らず」と否定を二回も使い、聞く側、読む側に疑問を生ぜしめ、考えるようになります。「では、一体、天は何を造るのか。造物主というではないか」と思うところで、「されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく」と続けるのです。これを逆に、いうと「天より人を生ずるには……」と始めますと、別段疑問も持たない平凡な文章となってしまう、深く印象に残る多文ではなくなってしまうでしょう。

福沢は教育者として、被教育者、生徒の主体を大切にしているのです。自主、独立が最も大切ととなえているのですから。『学問のすゝめ』において主体的論理として天賦人権説^{てんぶじんけん}を展開し、アメリカ独立宣言（1776年7月4日アメリカ13州独立の際の檄文^{げきぶん}）を日本の現実を踏まえながら福沢は独自に文章化をしているのです。かつて、福沢は『西洋事情』の初編巻の二「合衆国」の史記の部において、「天の人を生ずるは億兆皆同一にて」と訳していました。封建制度の根強く残る日本にあって、「皆同一」と単純にいうよりも、「人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と二回の否定をあえていい、強調する方がはるかに名調子であり、人の心の底に印象深く残ります。

かつて拙論「福沢諭吉の天皇観」（『知識人の天皇観』三一書房、1995年）でのべましたが、『学問のすゝめ』において「天」の概念（天、天下、天然、天地、天聖、天

5) 視覚的効果を指摘した研究に桑原三郎『福沢諭吉の教育観』（慶応義塾大学出版会、2000年）がある。

性、天命、天誅など）は94例使用されています。ここにおいて、福沢は「天賦人權論者」とみなされることが多いのですが、実は、同書において、「独立」の語も90例の頻出度であり、国家独立論者とみなされるべきなのです。『学問のすゝめ』を一層、詳細に分析しますと、ロックを源流とした抵抗権、又、ルソーのいう自然権は極めて弱く、国家に対する抵抗権・革命権の欠落を意識的にしており、日本の当時の遅れた現実を見すえ、「天」を天賦人權説のいう「天」概念ではなく、むしろ、「天下」という意味で使用しているのです（42例）。これが、明治維新の当時の人々の意識に一方で新鮮な「天」「造物主」（ごっど）という平等観、学問へのすゝめを唱く言葉と、それでいて、儒教によって形成されていた「天下」の公道との絶妙のバランスの上で福沢は『学問のすゝめ』を主張したわけですから、当時のベスト・セラーとなったのです。

福沢は優れた教育者でした。全く新しい独創的研究、体系的哲学者ではなく、学習者の形成されてきた学習動機、意識を熟知した上で、新しい学習内容を与えています。二つの意味において、私は福沢を優れた教育者というのです。一つは全く新しい内容だけを展開していれば学習者はついてこれず、又、もう一つは既知の知識だけでは新鮮味がなく、学習者は興味をもたなくなるでしょう。この意味で、福沢の『学問のすゝめ』は当時の日本の置かれていた現実とそこに形成されていた意識を十分にわきまえた上で、アメリカ、ヨーロッパの天賦人權説を基に、新しい内容をわかりやすい思想として展開しているのです。

3 福沢諭吉の教育思想

教育者として福沢自身は体罰は決してしていません。「少年の時分から老年の今日に至るまで、私の手は怒りに乗じて人のからだに触れたことはない」（『福翁自伝』）と述懐しています。独立自尊をとく福沢の教育思想ですが、身体を自由を奪う体罰、腕力を使つてのヘゲモニーを行使しなかったのです。一度、中津の塾の書生の一人に放蕩者がいて、再三再四夜中に酒に酔って帰って来ることがあり、「正座」を命じたが、グウグウいびきをかいて寝ており、その書生の肩をつかまえゆさぶったことがあります。これを福沢は「おれは生涯、人に向かってこちらから腕力をしかけたようなことはなかったに、今夜は気に済まぬことをした」（同上書）と戒律を破った坊主のように一生涯忘れぬ反省をしています。これは、何よりも自由、言論を重視したから

に他なりません。

今日、「演説」は一般に広く行われていますが、明治維新後、英語のスピーチを「演説」と訳し、これを実践して盛んにしたのは福沢です。「演説の法を勧めるの説」(『学問のすゝめ』第12編)において学問にとって欠かすことの出来ない方法であると力説します。慶応義塾で演説の練習が明治6(1873)年の夏に始まり、三田演説会として、明治7(1874)年6月27日に発会式を行い、同8(1875)年5月1日には、義塾内に三田演説館を開館しています。

福沢は演説において独立論を熱心にといています。「できるかぎりは数理をもとにして教育の方針を定め、一方には独立論の主義を唱えて、朝夕ちよいとした話の端にもその必要を語り、あるいは演説に説き」(『福翁自伝』)といます。福沢は独立論を強調するのには理由があります。東洋、日本と西洋国を比較しますと、東洋に欠けているものは二点あると西洋諸国を巡行した経験からいうのです。

「さて国勢の大体より見れば、富国強兵、最大多数最大幸福の一段に至れば、東洋国は西洋国の下におらねばならぬ。国勢の如何は果して国民の教育より来るものとするれば、双方の教育法に相違がなくてはならぬ。ソコデ東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較してみるに、東洋になきものは、有形において数理学と、無形において独立心と、この二点である。」(同上書)と福沢は総括をしています。明治維新によって富国強兵・殖産興業政策をなしたわけですが、どうしても東洋、日本の独立心が弱い現状が冷静に見てあったのでしょう。数理学を含め、この二点を教育することで、日本を救おうと決意していたのです。福沢の教育方針は数理と独立を教えること、これにつきますでしょう。「元来私の教育主義は自然の原則に重きを置いて、数と理とこの2つのものを本^{もと}にして、人間万事有形の経営はすべてソレカラ割り出して行きたい」(同上書)というのです。

明治4(1871)年7月に文部省が設置され、翌年2月に福沢の『学問のすゝめ』初編が刊行されます。8月に「学制」が頒布され、人民の八年制義務教育を目ざしています。このタイミングは冒頭に福沢の影響力の大きさをのべた「文部省は竹橋に在り、文部卿は三田に在り」の言葉通りでしょう。

福沢の『学問のすゝめ』初編にいう学問をすることによって「貴人となり富人となる」と個人の立身出世をとくのですが、「学制」、つまり近代的な国民教育制度の教育理念とは通底しています。「学制」の教育理念を明示した太制官布告「学事奨励に関

する被仰出書」は身分的差別を否定し、日常生活に有用な「実学」を奨励しています。さらに、学校に行くことにより立身出世や事業繁栄の土台となるという福沢の個人主義、功利主義の理念に立脚しています。さらに、「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」⁶⁾と子弟を就学させるよう要請しています。「学制」第21章も「必ス学ハスンハアルヘカラサルモノ」と半強制的に奨励しています。本来の教育の理念からいえば、個人の自由、自主、独立の精神に立脚し、自由意志によって教育がなされるべきでしょう。福沢の独立の精神に照らしても、「学制」=「被仰出書」の教育方針の個人主義によっても、強制的義務教育の理論は矛盾です。

個人の自由意志による教育と国家による、国家のための教育とは本質的矛盾を内包していますが、従来の研究では「学制」期において福沢の『学問のすゝめ』の「一身独立して、一国独立する」という有名な定式によって一方が他方の手段としてではなく、無媒介に直接的に「個人の開花と国家の富強とは一体のものとして把握されていた」⁷⁾ ということです。

明治政府による「国民」（実質上は「臣民」としての天皇制支配下であることに留意）としての義務に納税、徴兵制、さらに「学制」の義務教育が加わるのです。欧米列強と比較すればわかるように、日本は遅れて出発した資本主義国であり、資本の本源的蓄積もなく、国家による「上からの資本主義」の形成期でした。殖産興業をおこすにしても労働者の教育水準を高める必要があり、富国強兵をなすにも、各藩による方言によって命令、伝達もうまくいかない状況では、半強制的、「強迫教育」（不就学の自由の否定）が必要とされた必然性があります。

「強迫教育」とは納税・兵役・就学の三大義務の一つとして、各学校の出席率をあげるために児童が「毎日5分間の登校を命令」されたり、教師はもとより、警察官、水道吏員、清掃吏員まで動員して出席を強要していました。人民の要求によって近代公教育制度が確立したのではなく、国家による上からの命令によって、「学制」としての「臣民の教育」が強要されたわけです。しかし、この矛盾は、福沢諭吉の『学問

6) 太政官布告「学事奨励に関する被仰出書」（教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第1巻、竜吟社、1938年）。

7) 佐藤秀夫「近代教育の発足」（講座『現代教育学』5＜日本近代教育史＞、岩波書店、1962年所収、30頁）と金子照基『明治前期教育行政史研究』（風間書房、1967年、45頁）による。

のすゝめ』が内包している矛盾でもありました。一方で平等な人間として「生まれながら貴賤上下の差別なく」、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」であるわけです。しかし、「といえり」と間接的に接続させて、この人間世界をみると、実に貧富の差、貴賤の差があり、「その有様雲と沢との相違あるに似たるは何ぞや」と問い、「学問の力」こそが決定的であるととくのです。「無学なる者は貧人となり下人となるなり」、「およそ世の中に無知文盲の民ほど憐れむべくまた悪むべきものはあらず」、「かかる愚民を支配するにはとても道理をもって諭すべき方便なれば、ただ威をもって畏すのみ」とまでいうのです。もとより、「この人民ありてこの政治あるなり」であり、愚民であってはならないと啓蒙を福沢はしてるいのです。けれども、「強制教育」であります。

今日、福沢の『学問のすゝめ』と「学制」のもつ意義はその内包する矛盾にもかかわらず、高い意義をもっています。文明開化、識字率の高さ、近代国家としての日本の歩みにおいて大きく貢献してきたことは間違いありません。その後の日本の公教育の歴史は、福沢の自由、独立、立身出世さえも個人主義的と否定されてしまいます。近代学校制度の確立期にあって森有礼初代文相によって、教育は「生徒其人の声にするに非ずして、国家の為にすることを始終記憶せざるべからず」⁸⁾ といいます。個人原理に立脚するのではなく、従って国民に教育権があるととらえるのではなく、国家の為の教育、「公」教育が、国家主義として強調されてくるようになります。ここで内包していた矛盾が露呈してくるようになります。

福沢の『学問のすゝめ』初編では「無学なる者は貧人となり」と主張していましたが、無学であるから貧人となったのでしょうか。逆に、因果関係を転倒しており、貧しい故に、「無学」とならざるを得なかったのではないか、という問題があります。福沢はベスト・セラーとなった『学問のすゝめ』にいう「無学なる者は貧人となり」という因果関係の転倒を空論として否定するようになります（『家庭叢談』第24号、1876年）。さらに、無学故の貧困ではなく、貧困故に無学（不就学）になるのであるという事実を認識し、1884年「貧富論」になると、積極的に貧困こそ無知の原因であると唱くようになります。福沢は「福沢氏古銭配分の記」（『福沢論吉選集』第10巻、

8) 福沢は森文相の教育政策を「文明主義」に復帰させたものとして賞讃している。しかし、国家の為の教育であるならば教育の無償制を構想しなければならないが、義務教育であっても有償であり、矛盾であった。

岩波書店、1981年）において自分の子女に「遺言」風に重要なことを記しており、「世々子孫、福沢の血統、孜々勉強して自立自活、能く家を治む可きは言ふまでもなきことながら、万一不幸にして財に貧なるの^{うれい}憂あるも、文明独立の大義を忘れ、節を屈して心飢るの貧^なに沈む勿れ。」（同上書、329頁）と諭しています。

福沢諭吉は下級武士の子に生まれ、しかも早くして父に死なれ貧困の中で育った過去をふり返り、「貧士族にして余財あることなし」ながら、父の楽しみの「古銭」を「宝物」として子、孫に伝えよと申しています。ここでは「古銭」ですが、本当に言いたいことは独立自尊の精神そのもののあり様を教育し、それを伝えたいと思ったのでしょう。福沢は「一片の独立は生命より重し、之を妨げんとする者あれば満天下の人も敵に取る可し。親友の交も絶つべし」（『福翁自伝』）というのです。この何よりも強調した独立をなすために教育が大切であるとするわけです。

福沢の教育論は高弟の小幡篤次郎たちや、長男の一太郎等によって一層、鮮明になって福沢の「修身要領」として明治33（1900）年2月に発表されます。福沢自身は脳出血の大患よりようやく退院してきたわけですが、福沢の教育論を最も要領よくまとめています。ちょうど、親鸞^{しんらん}の教えを唯円^{ゆいえん}が『歎異抄^{たんにしょう}』においてエッセンスを搾り出したが如くです。

「修身要領」は第1条から第29条までありますが、大半は「独立自尊」の精神をさまざまな場面に応じて展開しており、「独立自尊」がキー・ワードとなっています。

第1条に「人は人たるの品位を進め、知徳^{ちとく}を研ぎ、……（中略）吾党の男女は、独立自尊の主義を以て修身处世の要領^なと為し」といい、第2条に「心身の独立を全うし、自^{みづ}から其身を尊重して、人たるの品位を辱^{はづかし}めざるもの、之を独立自尊の人と示ふ」とします。個人の生活の自立から、自己の進退、男女関係、家族関係、友人関係、さらに国家間の関係にまで独立自尊をとっています。第26条に、地球上の立国の「独り自ら尊大にして他国人を蔑視^{べっし}するは、独立自尊の旨に反するものなり」と批判しています。「教育の目的」に西洋諸強国の侵略を批判し、何よりも独立の大切さをのべたのです。「教育は即ち人に独立自尊の道を教へて之を躬行実践するの工風^{くふう}を啓^{ひら}くものなり。」（第38条）と教育の目的、意義をとくのです。

福沢の教育思想とは、福沢の思想の最も大切にしていた精神は何かを問うことと同義語であり、教育論が単独にあるのではなくて、福沢自身の思想そのものであることが、「修身要領」でわかります。

次に、福沢諭吉を一生涯の思想として、問い、考え続けた丸山真男の福沢観をみることで、福沢は後世、どう理解され、どう継承されたか、をみることにしましょう。福沢のエッセンスを他者の眼を通して対象化することとしましょう。

4 丸山真男の福沢観

丸山真男ほど一生涯において福沢諭吉を論じ、考え、学んだ政治思想史学者はいません。一体、何が丸山をして福沢を論じなければならないと感じさせたのでしょうか。この問いは、福沢研究からすると、福沢の思想の優れたところを折出することになります。それ故に、丸山の福沢論をとりあげましょう。

丸山は第二次世界大戦の最中に「福沢諭吉の儒教批判」（1942年、『丸山真男集』第2巻、岩波書店。以下、『丸山集』と略す）において「幕末から明治初期にかけての最大の啓蒙思想家、福沢諭吉」と評価します。それは福沢の『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』等の代表的名著を熟読した上で、封建的門閥制度の徹底的批判者としての福沢の儒教批判に賛同したからに他なりません。『福翁自伝』を読むと、福沢諭吉の父は豊前中津藩の士族・百助であり、漢学者として儒教主義を徹底して教えています。しかし、どんなに努力してみても、中津は封建制度で秩序が成り立っていて、身分制度に縛られていたのです。どれだけの人々が不平をのんだことか、諭吉は父の生涯45年を想い返すとき、亡父のことを察しひとり泣くのです。それ故、「私のために門閥制度は親のかたきでござる」（『福翁自伝』）と言い切るのです。丸山は諭吉の儒教批判を賛同しつつ論じているのには時局との関係で深い理由があります。明治新政府もやがて儒教主義を強調していきました。明治14年の政変後、文部卿の福岡孝弟は府県学務官を召集して、「教育には碩学醇儒にして徳望あるものを選用し、生徒をして益々恭敬整肅ならしむべく、修身を教授するには必ず皇国固有の道德に基きて儒教の主義に依らんことを要す」と訓示していました（西園寺公望『明治教育史要』『開国五十年史』上、明治40年に所収）。

明治維新政府の薩長藩閥政治への峻烈な批判としての福沢の儒教批判を論じることは、丸山にとっては当時の時局に対する抵抗でもあったのです。丸山の論文は「紀元二千六百年記念事業」の一環として東大が各講座の由来と研究現状をまとめ『東京帝国大学学術大観』として発行した本の中に収められています。忠君愛国の皇国史観の全盛期にあって、丸山の福沢論、儒教批判はそれへのギリギリの抵抗であったのです。

丸山の属する東京帝国大学に早稲田大学の津田左右吉が非常勤講師として政治思想史を教えており、丸山も聴講していました（1939年）。しかし、原理日本社による津田攻撃が激化し、津田は早稲田大学を辞職、著書も発禁処分となります。丸山は「津田左右吉博士の裁判に関する上申書」の署名集めをします（1941年12月）。

丸山は「福沢に於ける秩序と人間」（『丸山集』第2巻）を1943年に論じています。福沢という一個の人間が日本思想史に出現したことの意味を「国家を個人の内面的自由^①に媒介せしめたこと」にあり、「個人主義者たることに於いてまさに国家主義者^②だったのである」とし、秩序に能動的に参与する人間への転換は個人の主体的自由^③を契機としてのみ成就されるというのです。丸山は時局がファシズムへ傾斜していることを自覚した上で、「安易といえ、全体的秩序への責任なき依存の方がはるかに安易なのである」と批判しています。学徒出陣の時局にあつて、東大法学部助教授として制約の下で執筆されているが卓越した論で、学術論文が時論的な現実性、関係性、緊張感を持っています。それ故、友人は「あれを読んで涙がでた」「丸山はあれを生命がけで書いた。だが、あれからあとは墮落の道である」と丸山に語ったといひます（植手通有「第2巻解題」『丸山集』第2巻）。

敗戦後、再び丸山は福沢を論じます。戦前の国家主義に対し個人主義、民主主義の価値観の一八十度転換に際し、丸山は一貫して福沢の思想を今日の時代状況の中で学ぶべきものとしてのエッセンスを抽出しつつ、論じているのです。「福沢に於ける『実学』の転回——福沢諭吉の哲学研究序説——」（『丸山集』第3巻）は1947年に発表されました。そこで丸山は福沢の位置づけを「日本のヴォルテールといわれる。我国に於て『啓蒙』を語ることは即ち福沢を語ることでありとも過言でない」と評価しています。今次の惨澹たる敗戦によって、日本の明治維新以来の近代化政策がいかなるものをもたらしたかが白日の下に曝されていた中で、再び世間から福沢は「自由主義者、個人主義的功利主義者」という時代精神にかなうものとして舞台に呼び戻されたのです。丸山はこれに対し、福沢は狭義の哲学者ではないが、彼の問題意識は一般に考えられているより「はるかに深奥なものであった」として『学問のすゝめ』の学問観に注目します。福沢は「学問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ詩を作るなど、世上に実のなき文学を云ふにあらず」（『学問のすゝめ』『福沢諭吉全集』第3巻）といひました。有閑的なスコラ的な学ではなく、「自ら勞して自ら食ふ」生活者としての「実学」なのです。丸山は「福沢の実学に於

ける真の革命的転回は、実は、学問と生活との結合、学問の実用性の主張自体にあるのではなく、むしろ学問と生活とがいかなる仕方で結びつけられるかという点に問題の核心が存する」（『丸山集』第3巻）と厳密に説くのです。

近代理性の精神はデカルト以来、客観を対象とし分析し、批判することによって前進してきました。ニュートン力学に結晶した近代自然科学のめざましい勃興はデカルト以後の「強烈な主体的理性の覚醒によって裏うちされていたのである。それはデューイがいう様に、理論的に自然を駆使するところの逞しい行動的精神であった」（同上書）と丸山はとらえ、この近代理性は福沢の「実学」、彼の実験的精神、行動的精神にみることができると唱くのです。「福沢は数学と物理学を以て一切の教育の根底に置くことによって、全く新たな人間類型」（同上書）の育成を志したと丸山はその革命的転回を見すえているのです。この点、和辻哲郎に代表される福沢観、即ち「功利主義的個人主義的思想の通俗的紹介に過ぎ」ないと認識とは異なり、むしろデューイに通じるプラグマティズム、ヴォルテールの啓蒙主義を丸山は福沢に見ているといえるでしょう。敗戦後の厳しき状況の下、丸山は日本ファシズムの思想を問いつつ、西洋にあって東洋になき精神、近代理性、科学主義、実用主義をとりだすが、それらは我が日本のかつての福沢の思想、哲学の中にもあったのではないかと注目しているのでしょうか。丸山の「福沢諭吉の哲学——とくにその時事批判との関連——」（『丸山集』第3巻）は体系的哲学者でない、原理的哲学者ではない福沢の内面に立ちいたり、『文明論之概略』の中から、福沢の内奥の哲学を明らかにしています。

次に、丸山は「近代日本思想史における国家理性の問題」（『丸山集』第4巻、1949年）において福沢を「国家平等観念の確立と国家理性思想の早熟的成長」として論じています。1952年には『福沢諭吉選集』第4巻の発行に際して「解題」を執筆しています（『丸山集』第5巻）。福沢はアメリカの優れたところは「人の多きが為に非ず、^{かいがい}甲斐甲斐しき活物の多きが為なり」（『福沢諭吉全集』第7巻）とデモクラシーの精神にありとしていました。「日本世界をもつとわいわいとアダテーションをさせてさうして進歩する様に致したいと思ふ、それが私の（中略）死ぬ迄の道楽」（同上、10巻）と福沢の最晩年までの主張に丸山は注目します。よく知られよう今日の「演説」という用語とその形態は福沢のアメリカ見学後、三田の慶応義塾からはじまったのですから、アメリカ民主主義、自由主義を推進させようとしたわけです。

1953年に丸山は『世界歴史事典』（第16巻、平凡社）に「福沢諭吉」の項目におい

て、福沢の後世への最大の足跡として、政治的帰結にあるのではなく、むしろ、「日本人の思考様式と日常的な生活態度に対する透徹した批判にある」とし、『事典』という客観的冷静な文体をこえ、次のような深い思い入れの強い文章となっています。

あらゆる形態での「惑溺」^{わくでき}からの解放、対論と会議の意義づけ、男女間の新しいモラルの確立、教育における自発性と想像力の尊重などのための諭吉のめざましい奮闘は、彼が脳出血でついにふたたび起たなくなる最後の瞬間まで止むことがなかった。無位無官の在野思想家として終った諭吉の輝かしい生涯は、その掲げた独立自尊^{たいはい}の大旗とともに、彼の冒したあらゆる過失と偏向を超えて日本国民の胸奥に生き続けている。（『世界歴史事典』第16巻、平凡社）

1961年『日本の思想』（岩波書店）の一部に丸山は「『である』ことと『する』こと」において福沢の行き方をわかりやすくとき、今日の高等学校の現代文の教科書になっています（例えば、安藤宏ら四名共著『現代文』筑摩書房）。「である」こととは、封建制社会の血族関係であり、君臣の関係、上下の関係であり、家柄や資産などに縛られています。これに対し、丸山は福沢の『日々のをしへ』の一節「世の中にむつかしきことをする人を貴き人といひ、やすきことをする人を賤しき人といふなり。本を読み、物事を考へて世間のために役に立つことをするはむつかしきことなり。」をとりあげ、「である」価値から「する」価値への転換を重視します。丸山は福沢をたいへん評価し、「価値基準の歴史的な変革の意味が、このような素朴な表現のはしにもあざやかに浮き彫りにされております。近代日本のダイナミックな『躍進』の背景には、たしかにこうした『する』価値への転換が作用していたことはうたがいないことです」（『丸山集』第9巻）というのです。

近代社会は明治維新によって身分社会を打破し、あらゆるドグマを実験のふるいにかけて、あらゆる領域でア・プリオリ（先天的）に通用していた権威を「である」論理から、「する」論理へと焦点を移動させることが重要であると丸山は福沢の思想、生きざまに即して価値転換の意義をとくわけです。

丸山は西欧化と知識人を「福沢諭吉・内村鑑三・岡倉天心」の三人を比較分析することによって、福沢の思想を位置づけ、「不思議な組み合わせであるが、三人の言論と行動には、あらゆる矛盾を貫いて執拗に響きつづけるある基調音があった」と個性

的な思想をとりあげ、学ぶ意味があるとするのです。

1958年に慶応義塾編『福沢諭吉全集』全21巻（岩波書店刊）の刊行に際し、丸山は「福沢諭吉の考え方」（『図書』1958年11月号、後『丸山集』第7巻所収）を執筆しています。世界においても、日本においてもすぐれた思想家というものは必ずしも生前、死後を通じてそれに価する尊敬を受けるとは限りません。事実、明治のごく初年には、「ホラを福沢^{ふく}、うそを諭吉^{いう}」というような悪口さえいわれたことがあります。今日では「偉人」としての「定評が確立している」と丸山はいいます。しかし、「だれが福沢をほめないものがあるろうか、しかも何人が福沢をほんとうに読んでいるだろうか」と真剣に問いかけているのです。丸山はこの問いを一生涯かけて、自分自身に問い、福沢をほんとうに読みつづけているのです。ポピュラーな尊敬の対象とされればされるだけ、「距離は美化する」という法則が働らき、祭られる対象として疎外されるわけです。丸山は時代の要請による讃美ではなく、両眼主義として対立的な二元論、例えば国家と社会、権力と自由の相関関係をハッキリつかまえていたという点で、「福沢は少くも日本ではユニークな思想家だった」と評価するわけです。

丸山は一生涯をかけて福沢から学ぶために、読み、考え、発言を続けています。1984年4月に日本学士院で「福沢における『惑溺』という言葉」と題して報告していますが、人生の最大の悲しみである息子の死というショックが丸山をおそいます。次男健志が4月15日に享年34歳（丸山は70歳）で死去しています。この苦しみの中でも、1986年には『「文明論之概略」を読む』（上下、『丸山集』第13、14巻）を発刊しています。翌年6月には安東仁兵衛、筑紫哲也らと九州の福沢諭吉旧居まで訪ねています。1990年76歳の時、肺炎の入院後、自宅療養をしますが、9月日本学士院で「福沢諭吉の『脱亜論』とその周辺」と題して報告しています。1992年9月に「福沢における文明と独立」と題して日本学士院で報告し、10月には中国の上海で『福沢諭吉と日本近代化』（学林出版）を刊行しています。

1991年には国立療養所中野病院へ入退院をくり返しますが、丸山はアメリカ独立宣言の「文献解題」を加藤周一とともに編集した『日本近代思想大系15 翻訳の思想』（岩波書店）に発表しています。福沢を意識してのことです。

1993年には東京大学法学部政治学研究会主催の『忠誠と反逆』合評会に参加していますが、12月に体調の異変を覚え検査を受けた結果、肝臓癌を知ります。その為、1994年80歳で、自分の肝臓癌の症状に関する詳細な報告を友人におくっています。恐

らく「自己の死」を自覚したのでしょう。丸山の弟邦男が享年73歳で死去した（1月24日）ことも影響しているのでしょう。

丸山は著作集刊行を決意し、入退院をくり返す（3月、6月、12月）、わずかな間に政治思想学会の設立に参加します。

やがて、丸山は1996年8月15日、享年82歳で死去しますが、政治思想史上のメルク・マールとなった“8月15日”であったことは運命的です。

5 お わ り に

「日本のヴォルテール」といわれる福沢諭吉の教育思想を拙論は、諭吉の生い立ちから分析し、自己教育を具体的にみることにしました。生活の中の工夫から、「する」論理、道具主義、製作（ポイエシス）の論理を引き出し、西欧のプラグマティズムを学ぶ以前に既に自己教育の中からレディネスは出来ていたことを明らかにしました。

反儒教主義は父の短命に終った生涯から、諭吉が気付いたもので、一身独立、一国独立の精神は苦学する中で自己のアイデンティティとしたのです。教育者として、優れた才能、情熱を注いで、独立自尊を説き続けます。『学問のすゝめ』は明治維新後の日本の学制に大きな影響を与えました。欧米列強の中で、遅れて出発した日本は、その後、富国強兵、殖産興業をおこし、高い教育水準で急速に資本主義国の仲間入りをしましたが、教育においても当初の自由、個人原理の立脚点がなくなり、国家主義の原理が支配的になります。明治維新以後の日本に大きな影響を与えた福沢の『学問のすゝめ』の個人主義、独立自尊は、やがて「教育勅語」や大日本帝国憲法を経て、欧米列強との激烈な帝国主義間の戦争となって、国家主義、絶対主義に抑圧されるようになります。戦争中は福沢はかえりみられることはありませんでしたが、戦後、再びアメリカ思想とともに、福沢のプラグマティズム、自由主義、独立自尊の精神が再評価されるようになったわけです。

福沢の精神を単純に時代の潮流によって肯定、否定する方法ではなく、両眼主義、逆説を含め、多角的、多元的に分析、考察する研究方法が今後とも課題となるでしょう。